

---

# 巡るフラム・ヴェール～Flamme Vert

犬野ミケ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

巡るフラム・ヴェール〜Flamme Vert

### 【Nコード】

N19490

### 【作者名】

犬野ミケ

### 【あらすじ】

幻獣と呼ばれる、人間でも動物でもない、この世の理から大きく外れた生き物が存在する世界。

人々の中には、その幻獣と契約し、本来人間が持ち得ぬ力を得る者もいた。彼等は獣使いと呼ばれ、民の希望となる時もあれば、敵として忌避されることもあった。

獣使いの一人、リュシーは並外れた才能を持っていながらもそれを活かすことなく、一体の獣さえも従えていない。

これはそんな彼女の話。

## 二人分のMerci

冬に入る直前の晩秋。目に凍みる乾いた風に、髪や衣服の裾を弄ばせながら立つ、二人の青年の姿があつた。秋風は強く、時々、落ち葉を舞い上げて細かい破片を二人の目の目の中に残そうとしていく。

一方は二十代半ばと思われる。肩口ほどで切り揃えられた髪は、水銀の清流のように美しい銀髪である。豊かなその銀髪は滑らかで痛んでいる様子がなく、執拗に手入れされた高貴な貴婦人のそのような美麗さを持っている。瞳は明るい緑で、まるで焰が燃え盛っているかのように光を宿し、その周りを髪と同じ銀色の睫毛が縁取る。

細い顎に、長い指が添えられる。

「本当に、考え直す気はないのかい？」

「ねえよ。これっぽっちもな」

対するもう一人が鼻を鳴らしてそっぽを向く。

こちらは、先の男よりも二、三歳ほど年下に見える容姿を持っている。息を飲む見事さを誇る黄金色の髪は腰まで届き、銀細工の円筒の形をした髪留めを用いて、襟足の辺りで一つに括くられている。髪自らが輝きを放っているようにも見える。深い赤色の瞳は、身体中を駆け巡る血の色をそのままに写し出していて、見る者を吸い込んでしまいそうだった。

白く尖った犬歯を銀髪の男に見せつける。

「俺はもう二度と束縛されたくない。お前の選択は、俺が嫌う道を進む事だ。悪いが、死んでも拒否させてもらうぜ」

それを聞いた銀髪の男は、困ったような笑みを浮かべる。

「別に私は、君を止めに来た訳じゃないよ。そんなにカリカリしないでくれ」

金髪の男が鼻を鳴らす。露あひにしていた犬歯を赤い唇の中にしまったものの、未だに眉を顰ひそめていた。腕を組んで、取り敢えず話を聞く姿勢をとる。

銀髪の男は、一層強く吹いてきた空風からかせに目を瞬く。翠色の焰が現れては消え、現れては消え繰り返した。

「私は君の意見を尊重する。君の意志は、私には到底止められないさ」

「止められるだろうが」

金髪の男が怒気を孕はらんだ声で遮る。赤い瞳の瞳孔が、針のように縦長に細くなる。この変化は、銀髪の男からでも視認出来るものだった。

演技ではなく、本心から怒りを覚えている証拠である。

「何故、実力行使しようとしねえ？ お前は、お前だけは、俺を従わせられる。からかってんのか？」

ギリリと噛み合わされた歯が、肉食獣の如き鋭さを帯びていく。血の色を写した紅玉の瞳くまめが、更に赤みを増していく。金髪の男の全身から、怒りが発せられていた。それは一言一言と言葉を紡ぐ度に強くなっていくようである。

しかし、その怒りの矛先である銀髪の男は、軽く肩を竦すくめて首を横に振る。

「まさか。そんな事をすれば、束縛が緩んだ隙に、舌を噛み切つて

でも死ぬつもりだろうか？」

銀髪の男は次に何を言わんとしているのか、金髪の男が赤い目を眇<sup>すが</sup>めて待つ。

「今までのお礼を言おうと思ってね。それと、解約を」  
「は？」

金髪の男が、その言葉に間抜けに口を開く。完全に毒気を抜かれてしまった様子だった。鋭く尖っていた歯は丸さを帯びて人間のようにならなくなり、針のように細くなっていた瞳もほんの少し横長気味の円に戻る。

その反応を見て、銀髪の男はおかしそうにクスクスと笑う。この場では初めて流れた、苦笑でも嘘でもない、純粹な笑声だった。

「額面通りさ。君を解放する。人の上に縛られる私と、自由を求め羽ばたく君とでは、もう会えないかもしれないだろうか？」

「何を言って……」

金髪の男があからさまに狼狽<sup>ろつぱい</sup>する様を見て、銀髪の男は緑の焰が宿ったような目を優しく細める。

「地位は残しておくさ。困った時に使えるように」

それを聞いて、金髪の男が唇を噛み締めて俯く。瞳の色が変化を始めていた。赤色が薄まり、紫色になっていく。

その変化を、銀髪の男は微笑ましそうに見ていた。

「これだから人間は……」

金髪の男が銀髪の男をキツと睨み付ける。

その瞳からは更に赤みが抜けて、怒りに隠されていた本来の色を取り戻しつつあった。睨む視線は建前だけのもので、本心ではないのだろう。

しかし銀髪の男はその視線に少したじろぐ。

「礼を言うのはこっちの方だ。世話になったな、この馬鹿！」

直後、今までとは比にならない強風が吹き付ける。

銀髪の男は反射的に目を強く瞑り、顔を守る為に両腕を掲げた。

「……………おや」

銀髪の男が目を開くと、もうそこには金髪の男の姿は無かった。

忽然とその姿を消していた。あの、目を見張る見事な金髪はどこにも見当たらない。しかし、踏み締められた地面は、彼が先程まで確かに存在していた事を証明している。

銀髪の男は、それを名残惜しそうに見つめていた。

「『礼を言うのはこっち』か……………」

銀髪の男は困ったように眉尻を下げる。

「私はまだ、お礼を言っていないのだけれど」

風に運ばれどこからか飛んできた落ち葉が、先刻まで金髪の男が立っていた場所を隠していく。

銀髪の男は空を見上げた。

晩秋の空はどんよりと曇っていて、薄暗い。

「ありがとう。不甲斐ない私を支え続けてくれて、ありがとう」  
しかし、彼は知っている。  
その上に広がる、蒼穹を。

「これからも、ずっと私の事を見守っていて欲しい……ずっと……」  
その願いは、落ち葉と共に風に舞い上げられ、そしてどこかへと  
吸い込まれていった。

## 二人分のMerci（後書き）

こういふベタベタな話は嫌いなんです……  
序章をこうしないと物語として始まらないので……  
でもなんかもうちょっと考えて書けば良かったですね



少女と贓物（贓物）（前書き）

打ち間違いがあれば、注意をお願いします。

## 少女と贓物（贓物）

さて、どうするべきだろうか。

この国、神聖ジルベルスタイン大帝国、通称ジル帝国の首都、ポワール。

その正ま中心なに位置する場所にある、ポワール中央公園。そこでリュシーは彼かれ此こ二十分程、足を止めて悩み続けている。

彼女が立ち尽くしているのは、公園に設置されている石像の前である。石像と言うのは、神聖ジルベルスタイン大帝国第五代国王である賢帝と称されるアルベリックと、その契約獣、序列一位の神獣セレスタンが刻まれた物なのだが、リュシーを悩ませている原因はそれではない。

否いや、しかし……。これは……拾って派出所に届けるべきなのだろうな。

リュシーの視線の先にあるのは、大きな金剛石を主役として、紅玉や青玉をふんだんにあしらった首飾りだった。

値ばかりが張りそうで、美的価値の無い、自分の力を誇示しようとする様な趣味の悪い物だが、公園を利用する様な一般人が容易に手に出来る装飾品では無い事も確かである。

となると挙げられるのは、この首飾りが盗難品であるという可能性。これを派出所に届ける場合、届けに向かう途中で手にしている所を関係者に見られ騒ぎ立てられてしまうのを、リュシーは恐れている。

出来る限り波風は立てたくないと言うのがリュシーの現状だ。見なかつた事ことにしたい。

したいのだが。

今更、見て見ぬ振り等、出来る物か。

焰ほのおの様に魅せる翠の目を吊り上げ、リュシーは決心を固めて首飾りを拾う。およそ十分に渡る熟考の末の決断だった。

勢いよく首飾りを掬すくい上げたせいで、地面に擦れた爪の間に砂が入ってしまう。だがそれも全く気にせず、リュシーは足取り荒く公園を横切って行く。

リュシーが地面を踏み締める度に、その振動で、先だけを三つ編みにしたツインテールの長い銀髪が揺れる。

その見事な銀髪か、それとも燃える様な翠眼にか、はたまたリュシーの秀麗な容姿にか、通行人の殆ほとんどが彼女に視線を送る。

そんな好奇の視線を荒々しい動作で振り切り、リュシーは一心に公園の出口を、そして派出所を目指す。

例え盗人と疑われたとしても、本当の事を言えば良たいだけではないか。そうだ、私は落とし物を届けるだけなのだ！

そして愈々いよいよ、広い中央公園の南口に至ろうかという時

「うあつ!?!」

リュシーは右腰に後ろから激しい衝撃を受けて前のめりになる。咄嗟たつたに右足を前に出し、そしてその更に前に出した左足で転倒しないよう踏ん張ろうとするが、重心が掛かかった左足を払われ、今度こそ支えきれずに尻餅をついてしまう。

尻餅をつく時に右足を後ろに滑らせて膝を付いたせいで、ミニスカートのニーソックスという出で立ちで守りの薄い膝を、ジクジクとした痛みが襲襲ってくる。擦りむけて血が滲にじんでいるであろうことは、見なくても分かる。

少しだけ涙で潤んだ翠の目を上げると、そこに映ったのは走り去っていく二つの小さな背中。

「あの小僧共、掏摸か！」

痛みに震える膝を叱咤し、リュシーは掏摸の少年二人組を追いかける。

リュシーの履いているショートブーツは、ヒールもそれほど高くないし太いので、見た目よりも安定感がある。ただ、ミニスカートが捲れ、中のポリウラムのあるペチコートが揺れる度に、下着が見えそうになるのが危なっかしい。

「その小僧共、待て！　こら馬鹿！　大人の脚力を舐めてると痛い目に遭うぞ！」

とは言うものの、リュシーはまだ十八で、完全な大人とは言えない。しかし、掏摸の少年達から見れば十分に年上であり、体力的にも大きな差がある事は確かである。

それでも必死にリュシーを撒こうとしているのか、少年達が角を曲がって大通りの人混みの中に紛れ込む。だが、視力の良いリュシーを撒ききるには至らない。

「おい、小僧共！　それは駄目だ、駄目なんだってば！」

早く走ろうと思えば思う程に、背中のバツクパツクが跳ねて存在を主張する。少しでも前に進みたい今は、煩わしくて仕様がなかった。いつそのこと捨ててしまいたいが、それでは後が困る。やはり、背負っている必要があるのだ。

どうにかならないものかと、リュシーは外見を裏切る様な舌打ちをして、再度、掏摸の少年達を説得しようと試みる。

「待てと言っているだろう！ 返せば菓子<sup>おし</sup>を奢<sup>お</sup>ってやる！ 本当にヤバいんだ、それは恐らく

盗難品なんだ。

そう叫ぼうとしたが、言葉は声にする事が叶わなかった。左から突然、横殴りの衝撃がリュシーを襲ったから。先程、掏摸<sup>スリ</sup>の少年達が受けた衝撃とは、全く格の違う強さだった。

「ッ！？ かふっ、ケツ、ゴホ……あ……」

衝撃を受けたのは左の肋<sup>おしほ</sup>から脇腹にかけて。

喉につつかえた物を出そうとして咳をするが、それが衝撃を受け、箇所<sup>ところ</sup>に染み、どうしようもなくてリュシーは患部<sup>うわぶ</sup>を抑えて蹲<sup>うつま</sup>る。リュシーは、未だ<sup>いま</sup>に現状を把握できていなかった。ドン、という鈍い音が聞こえた頃にはもう彼女の体は宙に舞っており、地面に打ち付けられた時に漸<sup>や</sup>く痛みを実感した。

そうだ、あの。

「少年達は！？」  
「捕まえたよ。この、私が、ね」

叫びに返答があったと同時に、地を這うリュシーの目の前に、黒い男物のブーツが下ろされる。

「御苦労様」

「ッ……！」

嫌味つたらしい、粘つきのある声と共に、ブーツがリュシーの視界から消える。

ブーツが動いたのか、リュシーの視界が動いたのか。果たして、その両方だった。

まだ痛みが強く残っていた左肋を上蹴り上げられ、リュシーの体勢は上下がひっくり返り、後頭部を建物の壁に強打する。

視界が変わってまず目に入ったのは、突然の暴力沙汰に驚いて、遠巻きに様子を窺う人々だった。巻き添えを喰らうのはごめんだとばかりに、距離を置いている。正しく、見えない壁があるようだった。

仕方がない。

リュシーはそんな人々の行動を肯定した。

ここにいるのは、特に特別な力も持たない、ただの一般人なのだ。リュシーもその括りの中に片足を突っ込んでいるから、よく分かる。自分よりも遥かに強い相手に逆らおうとするのは、酷く苦しい。

「むかつくな」

「何か、言ったかね？」

リュシーは、自分を二度も痛め付けた人物を見上げる。

黒い髪を後ろに撫で付け、全身を覆う服も黒で統一している。頬の瘦けた青白い顔に、三白眼。

背後には二本足で立ち上がる茶褐色の牛の様な獣を二体、従えている。角に丸みを帯びた半透明で茶色の石が填まっている事から、幻獣だと推測出来る。それは幻獣が幻獣たる為の要なのだ。色や形、付属する場所は違えど、どの幻獣も必ず持っている。力の源とも言われる。

一体は両脇に一人ずつ、掏摸の少年を抱えている事から、リュシ

「を吹っ飛ばしたのは何も持っていない方だろう。」

一番安定するのか、二体とも前屈みの姿勢だった。

幻獣は、人に化ける。力の強い幻獣ほど、人に近い形に成る。この現世では、人に近い形の方が存在として安定するらしい。

つまり『力の強い幻獣は、化けると人に近くなる』のではなく、『人に、より近い安定した形に化ける事が出来る』という事だ。

男の従えている幻獣

おそらく魔獣

は、二

足歩行をしているものの直立とは言いがたいし、人に近い要素はない。

幻獣としての力は、弱い。

勝てるか？

そう浮かんだ思いをすぐに消す。

リュシーは獣使いとしての知識と能力はあるものの、契約している幻獣は無。男よりも、尚更悪い。

良くてもせいぜい引き分け。

だが、そうするとすれば、先に少年達を逃がさねばならない。

「その子達を解放してくれ」

「命令か？」

「……懇願だ」

男はしばらく勿体振るように指先で顎を撫でていたが、やがて牛達に「下ろせ」と合図を送った。

投げるような動作で以て。

「んんるるる……」

牛は主人の命に従って、少年達を放る。

「くそが！」

リュシーは痛みと疲労で気だるい体に鞭打って、少年達の落下地点に飛び込む。

「  
ッ！！！」

一人は上手く両手で受け止める事が出来たが、もう一人は手で受け止めきれない為に、頭を打たないよう、地面との間に太ももを割り入れて守る。頭の重みと硬さが一点に集中した痛みにも、リュシーは苦鳴を噛み締めて堪えた。

パチ、パチ、パチ、と頭上から拍手の音が降ってくる。

それが男の嫌みによるものだという事など、リュシーには分かりきっている事だった。

「いやあ、見事見事。まさか二人とも助けるなんてね」

その言葉を無視し、リュシーは恐ろしさと後悔に震える少年達の尻を叩いて無理矢理立たせる。泣きそうか顔でリュシーを伺う少年達を、向こうに追いやった。

「お前達は逃げろ、早く」

その言葉に牛が僅かに反応する。

「早く！」

リュシーの剣幕に押されて、少年達は野次馬の壁の中に割り込んでいく。

追いかけてよとする牛を、男が片手を上げて遮った。



「小娘。お前は逃げないのか？」  
「私まで逃げたら、お前達は捕らえやすい彼らを優先して殺すだろう？」

壁に手をつきながら立ち上がり、リュシーは不適に笑って見せる。本心からの笑みではない。こんな場面で笑えるはずがない。男に動揺を与える為、自分を勇気づける為に作った笑みだった。

それに対して、男も微笑を浮かべる。こちらは、優位に立った者の笑みを。

「お前、ペドフィリアだったのか。人というのは見かけにはよらないものだなあ」

その言葉をリュシーは鼻で笑う。

「お前こそ、私のような小娘を苛めて楽しんでいるのだろうか？」

今度は右手を口の前に翳し、クスクスと笑う。

「変態。そしてその上、愚かでもある」  
「どつという意味だ」

リュシーの言葉に、男の顔が歪む。劣勢にある立場の中、それでもリュシーが浮かべている笑みもまた、相乗効果で男を不快にさせているのだろう。

男が初めて見せた余裕のない表情は、リュシーを尚更奮い立たせた。

「おお、怒ると蛭ヒルの様な顔が更に腐ったように不細工になるのだな。

おっと、失礼。愚かという言葉の事だな？」

リュシーの誹謗ひぼうに、男の口元が引き吊る。大衆の手前、冷静にあらうとしているようだが、もう一押しでそれも脆もろく崩れ去りそうだ。無礼の方法は心得ている。礼儀ある振る舞いの、反対の行動を取れば良いだけだ。

リュシーは唇を湿らせて、緊張を押さえようとする。

「飼い主とペットはよく似ると言っな」

男の眉が怪訝ひそそうに顰ひそめられる。

「その牛達の間抜けさは、飼い主に似たのか？」

リュシーのせせら笑いに、男がはっとしたように牛達を振り返る。

「お前等、首飾りはどうした!？」

牛達はグルルと唸り、少年達が去っていった方に首を向ける。首飾りは少年達と共に向こうに行ってしまった、とでも言いたげに、そちらの方向と男とを交互に見つめる。

牛達はよほど愚鈍であるらしく、首飾りを少年達から奪わねばならないという事すらも分からなかったのだらう。

「追いかける！ 今すぐに!」

「まあ、待つのだ」

熱いり立つ男を、リュシーはのんびりと引き留める。

「本当に少年達が今でもあれを持っていると思うか？ あれのせい

で災難に巻き込まれたのだ、牛達の言う通り、未だ持ち続けている  
とは考え辛いではないか」

思わせ振りに、バックバックとは別に帯びていたウエストポーチ  
を擦る。

「もしかしたら、私が持っているのかもしれない」

男が動きを止める。

「もしかしたら、少年達が持っているのかもしれない……さあ、ど  
つちなのだらうな？」

牛達は、避けていく野次馬の中をのしと歩いていつている。  
主人が足を止めた事にも、リュシーの声にも、全く気付いていない  
様子だった。

「まあ、少し考えれば解る事か。そもそも、守る為に少年を逃がし  
たこの私が、少年達を再度追いかけさせるように仕向ける訳が無い」

そこまで言うてから、リュシーは首を可愛らしい仕草で傾ける。

「ん？ いや、半分くらいはそうなのか。ふむ」

「この、小娘！」

回りくどい言い方ばかりするリュシーに業を煮やしたようで、男  
がリュシーの胸ぐらを掴み上げる。冷静な態度など、今は欠片も見  
当たらない。

「目的はなんだ！？ 自殺志願なら、叶えてやる！」

「目的？ この行動の目的を聞いておるのか。そつだな」

リュシーもまた、右手で男の胸ぐらを掴む。

「漸く捕まえた」

「ッ！？ つ何を」

リュシーは今まで浮かべていた笑みを唐突に消す。今まで絶え間なく笑顔を見せていた為、その変化はとても大きい事のように見えるはずだ。

男の焦燥と困惑が増長する事を願って、リュシーは感情を押し殺した顔を男のそれへと近付ける。互いの息がかかる程の近さ。

「牛をお前から遠ざける為だ。何故かと問われれば、」

何かが来ると、男は予感したのだろう。リュシーの胸ぐらを掴み上げていた手を離し、首にかける。

そのままギリギリと圧迫される中で、それでもリュシーは言葉を止ませなかった。

せめて、自分の怒りを、この心の底から腹が立つ男に力のたけぶつけてやりたい。

攻撃と、共に。

「こ、うするた、めだ　　！！」

リュシーの右手は男の胸ぐらを掴んで離さない。では余っている左手は？

ウエストポーチの中だった。腹の底から出した大声と共に入れた気合いで、リュシーはポーチからすばやく手を抜き、握っているものを拳ごと男の顔面に叩きつける。

「いいつけええええあああああつつつつ！！」

その並々ならぬ大声の迫力に、牛達が気付いて振り返るが、もう遅い。

「あああああああつつ！！」

リュシーがその手に握っているのは幻石。契約獣を持たない身でも、幻獣の力を結晶状に固めたこれがあれば、力を振るう事が出来る。

ただ、やはり本物の幻獣の力と比べると劣り、力を解放する為のパスワードとなる呪文の詠唱の後に、霊気を注ぐという手間が必要である。

また、発動させる媒体は結晶ではなく術者自身の体なので、かかる負担は結晶が強力であればあるほど大きくなる。そのため、好んで使いたがる人はいない。

リュシーの持っている結晶は全て強力なものだ。持っているだけの全てを握りこんでいる。しかし、この不意打ちに近い攻撃を成功させるには、呪文を唱える時間が惜しい。

だからリュシーは、握った結晶に霊気を無理矢理に押し込んだ。

「吹っ飛べ！！」

すまない、カミーユ。繋いで貰った命を、もうここで使い果たしてしまう。

叫びと共に、リュシーの左手を中心にして、緋色と橙色が炸裂。

みるみるうちに広がり、逃げ惑う野次馬達のすぐ背後まで迫って、黒煙の渦を巻く。

地<sup>えい</sup>が割れたのではないか、と思う程に大きく轟く爆音、実際に地は抉<sup>えく</sup>れている。

押し広がる熱風は建物を軋<sup>きし</sup>ませ、看板を飴細工の様に曲げていく。そして、現れ出た時と同様に、急速に収束していく火。不完全燃焼の黒煙が頭上を汚す。

爆発が抉<sup>えく</sup>つた、地面のタイルや煉瓦<sup>れんが</sup>の細かく砕け散った物が、呆然とする野次馬達に降り注ぐ。

リュシーは、理屈以上に危険な行為に及んだ。

呪文の詠唱無しで結晶の力を解き放とうとすると、結晶はその行為の主を明確な敵と見なし、暴発する。幻獣<sup>げんじゅう</sup>に渡った場合、それを使って人間に被害を及ぼさないようにする為の仕掛けである。

さらにリュシーは、余分に結晶に靈氣を与えた。結晶を解く為に必要な分より多くの靈氣を、である。その狙いは起爆である。

本来であれば、焰<sup>ほのお</sup>が相手を襲う幻術を込めた結晶である。そして暴発した場合は、その焰<sup>ほのお</sup>が他方向に分散する。しかし、リュシーはそれでは男を戦闘不能にするには至らないと思い、靈氣を流して爆発的に焰<sup>ほのお</sup>を増大させたのだ。

そしてその結果、この惨事となっている。良く整備されていたはずの街並みに、黒と緋が交錯している。

あの爆発の中、銀髪の少女が生き残る事は不可能だと、誰もが思った事だろう。

しかし、リュシーは

「……………ケホッ、ヒュ、ゴホ」

生きていた。

リュシーは乾いた咳を繰り返す。灰が喉の粘膜に貼り付いたかの様に、咳が止まらない。一瞬で強く広がった光に当てられた目がチカチカする。銀髪も肌も服も、煤けて黒くなってしまうている。

風呂に入つて、着替えたい。

そう思う所はリュシーもやはり年頃の女の子で、咳の止まらない口許を押さえながら、もう片方の手でスカートに付着している煤を叩いて払おうしとする。だがそう簡単に取れるはずもなく、むしろ擦った事によつて煤が布地に定着してしまった。

洗濯したら、取れるだろうか。最悪の場合、買い替えなければならぬ。リュシーが頭の中で、財布の残金とこれからの生活について思い浮かべていると、彼女の肩を温かく柔らかい手が抱いた。

「ほら、そんな煙たいトコに座り込んでないで。早くこつちにおいで。立てるかいい？」

見上げれば、中年の恰幅かっぶくの良い女性のニコニコ顔が目の前にあった。

「おばちゃんの肩に、腕を回しな」

女性が、よろめくりュシーの支えになつてくれる。ガツシリと安定感があつて、何より飾り気の無い優しさが心地良かった。誰よりも先にいち早くリュシーの下に来た所を見ると、普段から面倒見の良い人なのだろう。

彼女の行動に勇気付けられたか、反対側の肩を若い男性が支えてくれる。

「ここで休もうか。はい、腰下ろして。そこの壁に背中を預けると、楽だと思つよ」

そう微笑む女性の袖を、リュシーは引つ張る。

まだ完全に視力が回復していない為、周りの詳しい状況を知るに

は、誰かに聞く必要があった。

「あの……男は？」

ゆっくりと自分を壁に凭れ掛けさせる女性に、尋ねる。

それに答えて女性が、先程までリュシーがいた辺りよりも三メートルほど通りの中心に近い場所を指す。

まだ遠くの景色はぼやけてよく見えないが、緩慢な動作で動く二つの茶色い塊と、その間にありピクリともしない黒い塊が、女性の指の指し示す方向に確認できた。言うまでもなく、それは牛達と男だ。

「……死……んだのか？」

「死んでなんかいないさ！」

女性がさかさず否定する。否定が早すぎると言葉の真偽が疑われるとも思ったのか、今度はゆっくり、言い含める様にして言葉を発してくる。

「死んじゃあいないさ。ちょっと顔に火傷はあるが、あの程度で死ぬわきゃない」

安心させるように紡がれるその言葉に、リュシーは大きく胸を撫で下ろす。

「人殺しに……ならずにすんだ」

準備こそ出来ていなかったが、覚悟は出来ていた。

その覚悟が空回りに終わったという報告は、失敗の悔しさではなく、自分が人殺しにならずにすんだという安堵をもたらした。



ただ、その思いも、結局は自分自身の名誉の為に過ぎない。リュシーは齒噛みする。

最初は善意と正義感から首飾りを拾ったが、それを取って巻き込まれた少年達にはハイリスクノーリターン、良い事なしだ。男と牛にとっても、あと少しの所でリュシーという邪魔が入った。

生き様と言うのは大きすぎるが、彼らのそれを、リュシーは拒絶に近い形で壊したのだ。

社会的に見ればリュシーの方が正義と扱われそうであるが、爆発の被害を見ると、これではどちらが悪いのかとも取れない。男は周りを巻き込む様な事はしなかったが、リュシーは野次馬達にも多大な迷惑をかけている。

この行動は、他人の為になっているのだろうか。ただ、自分のエゴを貫こうと足掻<sup>あが</sup>いているだけの様にも思われる。

「私は……」

その声に、女性が優しい声で相槌<sup>あいづち</sup>を打つ。打ってくれる。

「私は一体、何をしたかったのだろう……」

膝の上で握り拳を作る。

考えても考えても、リュシーの思考は空白しか吐き出してくれない。誰かに聞けばその答えが解る様な気がして、どこかそこら辺に答えが書いた紙が落ちている様な気がして。

そんなはずもないから、リュシーは握り拳を固めて沸き上がる絶望感に耐える。

力を入れすぎて白くなった手に、分厚くて温かい女性の手が重ねられた。

「落ち着いて、深呼吸。答え探しなんて、その事を覚えてればいつ

でも出来る事さ……例外はあるだろうけどね」

最後に意味深な事を少し小さな声で呟き、女性は照れを隠すように大声で笑う。

「うん、難しい事は後回し！ まずは傷の手当てが先さね。誰か！ お医者を呼んでおくれ！」

「いや、いや、いいんだ。医者は要らない」

リュシーは女性の言を慌てて遮る。

ぼやけた視界でも、女性が首を傾げた様子がはっきり分かった。

「うん？ 何でさね」

「いや、ほら……」

リュシーはその場で両手を広げて見せる。

「不思議な事に、膝の擦り傷以外、大した怪我が無いのだ」

「ぐるる……」

「んんるる……」

互いに何らかの意思を交換し合いながら、牛達を中心に主人を抱えて薄暗い路地を進んでくる。

その様子を『彼』は牛達の進行方向から見ていた。

そんな『彼』に牛達が漸く<sup>やっぴ</sup>気付き、顔を向けてくる。鼻をスンスンと鳴らし、敵か味方かを判断しようと試みているようだった。

「てめえ等、あつたま悪いんだなあ。つーか、今やつと気付くとか、遅すぎるだろーが」

腰掛けていた木箱から身軽に飛び降りて、牛達と相對する。

「まったく、俺の影が薄いのかと思つちまつたぜ。ま、そんなわきやねーよな」

だつて俺だし、と自信満々な言葉を口にする。堂々と、躊躇<sup>ためら</sup>いもなく。

その態度から味方ではないだろうと結論付けたのだろう、牛達が痛みに呻く主人を地に降ろして、頭を低くし角を『彼』に真っ直ぐ向けて構える。

そんな牛達の行動に『彼』は目を輝かせて拍手を送る。

「よしよし、正しい判断だ。けどな」

『彼』の右手が左下から右上に一閃。

途端、少し手前に出てきていた牛の方に変化が訪れる。

「ぎゅぐるっ？」

異変に気付いたのだろう、相方が呼び掛けた時にはもうズレていた。

牛から見ると右下腹から左肩にかけて、ふつふつと赤い玉が線になつて浮き出てくる。と思えば、上の方が線に沿つて、重力にしたがい滑り落ちた。堰<sup>せき</sup>を切つたという表現では生温いぐらいに噴き出

す血。

だがその血は、噴き上げる先から、霞かすみとなつて宙に漂い消えて行く。両断された胴体から零れる腸も血も、それらを入れていた箱体さえも、全てが塵ちりとなつて消えていく。

「甘いんだよ、敵と解つた瞬間に襲つて来いよ」

これが、幻獣げんじゅうの末路。幻獣げんじゅうの本来の姿、つまり幻世げんせでの姿の主成分は瘴気しょうきである。その瘴気しょうきの塊が現世げんせに流れ出て意思を持ったものが、幻獣げんじゅうである。

しかし、瘴気しょうきのまま現世げんせを漂っていたのでは、いずれ風化して消えてしまう。

そこで、現世げんせに既存している人間以外の生き物の姿を媒体として、具現するのだ。

媒体を再起不能なまでに壊してしまえば、瘴気しょうきは媒体から流れ出て、媒体その物も影響されて瘴気しょうきとなる。そして、風化されて欠片も残さず消えるのだ。

今、牛の体から変化した霞の様に見えているものは瘴気しょうき、従つて牛の死を表している。

「よし、次」

呟いて、力を振るう。

もう一体の顔を吹き飛ばして、不満気に鼻を鳴らした。敵、とするには剩りあまにも弱すぎて、もっと暴れる積もりであった『彼』には物足りない。

瘴気しょうきに還つていくのを横目で確認し、歩を進める。

「おい、聞こえてっか？ 三下野郎」

と言ってから、顎に手を沿えて少し考え直す。

「いや、あの女の子の表現は上手かったな。採用しよう。決めた、お前の渾名は腐れ蛭三下野郎な」

酷い事を言いつつ、火傷の酷い男の顔を爪先で突つつく。

その刺激に、男の手が地面を掻き<sup>むし</sup>毛る。

「バリバリ生きてんじゃねえか。返事ぐらいしろよ」

そう言つて男の腹に手を突き入れた。

男の火傷で爛れた唇から、言葉とまらない絶叫が<sup>ほとばし</sup>迸る。

常人が聞けば胸糞の悪くなるような叫びを、まるで天上の音楽の様に、微笑んでうつとりと聞く。

「おお、あつたあつた」

男の腹を散々に掻き乱し、そして抜いた手に何か血でぬらりと光を反射する何かを握つて、笑う。

度を超えた痛みに、男の絶叫の音階が上がる。未だに気絶していないのが不思議なくらいだった。

案外、精神力は強いのかも知れない。そう思つてうつそりと笑む。

「これだ」

と、抜き取つた物を男に自慢気に見せる。

尤も、見せた所で男の網膜にそれが映っているのかは、分からないが。

「小腸よりも……まず先にこつちだろ」

そう言っただけで勝手に右手に、左手に持ち替えて玩んでいるのは、ドロドロとした血液や細かい肉片にまみれて解り辛くはあるが、細長い方の三角定規が丸みを帯びた様な形をしている。

肝臓だ。

『彼』は男の腹から、肝臓を抜き取ったのだ。

『彼』は抜き出したそれを、目を眇すがめして観察する。そして嬉しそうに口元を歪めると

「いただきます」

何の躊躇ためらいもなくかぶりついた。

口の周りを血で真っ赤に濡らし、もちゅもちゅと咀嚼そじやくする。

その顔が少々、悲しげな色を浮かべた。

「不味い。おっさんのだからか？ 酒、飲み過ぎなんじゃねえの」

そう言いつつも、食すのを止めない。

肝臓を食べ終えると『彼』はペロリと舌を出して、唇についた血を舐め取る。

「安心しろよ、腐れ蛭ヒル三下野郎」

足元に伏す男に向かって、ピツと親指を立てる。素晴らしい程に、状況にそぐわない行為だった。

「お前の体は残さず、好き嫌いせず、俺が全部食ってやる。つーか、死体残すと面倒だしな！ ……あれ」

ウインクのサーブスまでしたのに反応が全く返ってこない事に対

して、血に濡れた指を唇に当てて首を傾げる。

そんな可愛いと言っよりも、むしろおぞましい仕草をして、彼は呆れた様に呟く。

「もう死んじまったか。根性が足りねえな」

いかにも悲しんでいると言った風情で、溜め息を吐く。  
実際に、『彼』はこの状況を憂っていた。

「死肉って、不味いになあ。冷めないうちに食っちまわないと」  
再度、舌舐めずりをして『彼』は食事を再開した。

## 少女と臍物（臍物）（後書き）

久しぶりに長い文章を書けて、楽しかったです

まずは題名の話から

「臍物」は普段は「ぞつぶつ」と読む方が多いようです  
まあ、「ぞつもつ」と読む場合もあるし、一応「臍物」と同音異義語にはなっているかな、と  
首飾りの事ですね

「臍物」の方は……まあ、言わずもがな後半の事

次！名前！

名前はフランス系

地名もフランスの苗字

リュシーはLucieです

これはまだいいんですが、他の名前出した時にちゃんと文字が表示されるのか……

文字化けするヤツとがありますからね

以上！



サブタイトル修正しました

こっちは……振り仮名つかないんですね

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1949o/>

---

巡るフラム・ヴェール～Flamme Vert

2011年1月8日16時01分発行